

宗門安心章

第一信心皈依

万劫にも受け難きは人身、億劫にも遇い難きは仏

法なり。われら今さいわいに受け難き人身を受け、

遇い難き仏法に遇う、宿善のいたすところと雖も、

仏祖広大の恩徳に依らざるなし。いかでか歓喜し踊

躍せざらんや。偏に信心帰依の心を発し、如説に

修行しゆぎようをはげむべし。空むなしく一生いつしやうを過すごして、永劫やうぎやうに
悔くいを遺のこすことなかれ。信しんは道源どうげん功德くどくの母ははにして、行ぎよう
善ぜんの本もとはすなわち帰依きえにあり。至心ししんに合掌がっしやうし、篤あつく
三宝さんぼうを敬うやまうべし。三宝さんぼうとは仏法ぶつぽう僧そうなり。四生ししやうの終しゆう
帰き、万国ばんこくの極宗ごくしゆう、何れいずの世よ、何れいずの人ひとか、この法ほうを
尊たつとばざらん。人ひと尤ひとはなはだ悪あしきは鮮すくなし。よく教おしうれ
ばこれしたがに従したがう。それ三宝さんぼうに帰きせずんば、何なにを以もつてか

枉まがれるを直なおうせん。恭うやうやしく大だい法ほうの源えんをたずぬる

世尊せそんじようどう

ぎよくほ

ろくおん

はこ

に、世尊成道せそんじようどうのあかつき、玉步ぎよくほを鹿苑ろくおんに運はこばして、

五比丘ごびく

した

したい

ほうもん

と

さん

五比丘ごびくのために親したしく四諦したいの法門ほうもんを説ときたもう。三

宝ぼう

ときはじ

よ

い

宝ぼうこの時ときはじ始めて世よに出いず。

げんぜんさんぼう

しよう

せそん

これを現前げんぜんさんぼう三宝しようと称せしたてまつる。世尊せそんひとたび

涅槃ねはん

くも

だいしゆうひきゆうあいにんや

がた

涅槃ねはんの雲くもにかくれたまえば、大衆だいしゆうひきゆうあいにんや悲泣ひきゆうあいにんや哀恋あいにんや止やみ難がた

あるい

いし

きぎ

かみ

うつ

ぎぎ

こうよう

まつ

く、或あるいは石いしに刻きぎみ、紙かみに写うつして、巍ぎぎ々ぎぎたる光影こうようを末まつ

代だいにしの偲あるいび、或あるいは貝葉ばいように記しるし、黄卷こうかんに録ろくして、一いち代だいの

せつぽうことごと

ばんせい

つた

またえんちようほうぼう

びくしゆう

説法せつぽう 悉しつく万世ばんせいに伝つたう。又また円頂えんちよう方袍ほうぼうの比丘衆びくしゆうは

しぐ

がんりん

むち

じようぎ

しんいぎ

ご

たけく四弘しぐの願輪がんりんに鞭むちうつて、上座じようざの真威儀しんいぎを、五ご

じよく まつせ

えんぜん

しようぼうごじ

ひ

濁じよくの末世まつせに宛然えんぜんしたもう。みなこれ正法護持しようぼうごじの悲ひ

がん

じゆうじ

さんぼう

な

さんぼう

願がんにしてこれを住持じゆうじの三宝さんぼうと名なづく。しかも三さん宝ぼう

じつたい

がんらいにんにんじししよう

うち

ほんぐ

みずか

の实体じつたいは、元来がんらい人々にんにん自性じししようの中うちに本具ほんぐしたれば、自みずか

じ

かくししよう

きえ

ねんねんちあん

しん

ら自じの覚性かくししように帰依きえして、念々ねんねん痴闇ちあんの心しんなき、これ

を帰依きえぶつ仏無むじょう上尊そんといい、自みづから自じの心法しんぼうに帰依きえして

煩惱ぼんのう邪見じゃけんの心しんなき、これを帰依法きえほうり離欲尊りよくそんという。自みづ

ら自じの柔軟心じゅうなんしんに帰依きえして、自じなく他たなく一切衆生いっさいしゆじょう

と和敬随順わけいずいじゆんするを帰依僧和合尊きえそうわごうそんという。もとより

一いったい体にして自性じしやうの靈妙れいみやうを離れず、故ゆえにこれを一いったい

三寶さんぼうと名なづく。

上來三寶じやうらいさんぼうに三種さんしゆの別べつありと雖いえども、仔細しさいに点檢てんけんす

ればすなわち別異べつゐにあらず。偏ひとえにわが大恩教主だいおんきようしゆ

釈迦牟尼しやかむにぶつ仏ぶつの成等正覚じようとうししようかくに由来ゆらいし、三世一切さんぜいっさいの諸しよ

仏ぶつ諸尊しよそんも、南無釈迦牟尼なむしやかむにぶつ仏ぶつの一念唱名いちねんしよみようの中うちには含ふく

ませたもう。されば朝夕随所ちようせきずいしよに南無釈迦牟尼なむしやかむにぶつ仏ぶつと、

一心いっしんに唱となえ至心ししんに帰命きみようしたてまつるべし。

至心ししんに帰命きみようしたてまつるが故ゆえに、今いまよりのち、尽未じんみ

来際らいさい、誓ちかつて一切いっさいの邪魔外道じやまげどうには帰依きえせざるべし。

されば諸しよぶつ仏しよ諸ぼ菩薩さつむ無へん辺がんの願かい海せつに摂しゆ取しゆせられて、殊しゆ
勝しよを求もとめんと要ようせざれども、殊しゆ勝しよ 自いたら至いたつて、
光明こうみ不ふ尽じんの生しよ涯うがいを恵めぐまるること決けつ定じよして疑うたい
あるべからず。

第だい二に 自じ 覺かく 安あん 心じん

悲かなしいかな、われら一いち念ねんに悟さとれば直じきにこれ仏ほとけと
なるを知しらずして、却かえつて一いち念ねん迷まようが故ゆえに、自みずら凡ぼん

夫ぶとなりさがる。かくも尊たつとき仏法ぶつぽうを耳みみにしつつも、

一向いっこうに信心しんじん帰依きえの心こころなく、生死しやうじの海うみに浮沈ふちんして、

三毒さんどく五欲ごよくの妄念もうねんと憎愛ぞうあい取捨しゆしやの迷執めいしゆうに、日夜にちや造業ぞうごう造ぞう

作さして、永劫ようごう出離しゆつりの際きわもなし。

たまたま信心しんじんおこせども、自心じしん仏ほとけと知らざれば、

ただ徒いたずらに狂奔きやうほんし、傍家ぼうけ波々はは地に、仏ほとけを求め、法ほう

を求めもとて止むやときなし。憐あわれというも愚おろかなり。

いずれの人ひとも速すみやかに、善智識ぜんちしきには遭あいまつり、無む

みようちようやゆめすじようらくねはんいりあいかねこころ

明長夜の夢を捨て、常楽涅槃に入相の、鐘に心

をすましつつ、菩提心ぼだいしんをぞおこすべし。

そもそも諸仏出世の一大事因縁は、衆生しゆじようをして、

ぶつちけんひらしゆじようぶつちけんしめしゆじよう

仏知見を開かしめ、衆生に仏知見を示し、衆生に、

ぶつちけんさとしゆじようぶつちけんどうい

仏知見を悟らしめ、衆生をして、仏知見の道に入ら

だいししようせそんしめ

しめんがためなりと、大聖世尊は示されぬ。

しかもりょうぜんえじょう靈山會上にて、ぼんてんのう梵天王がけん献じたるこんぱら金波羅

げ華をねん拈じつつ、はがんみしやうめ破顔微笑を賞でたまひ、しやうぼうげん正法眼

ぞう蔵、ねはんみやうしん涅槃妙心、じつそうみみやう実相微妙のほうもん法門を、まかかしやう摩訶迦葉に

つたぞ伝えらる。

それよりのてきてきそうじやう的々相承し、にじゆうはちだいぼだいだるまだいし二十八代菩提達摩大師を

ば、しゆうびそわが宗鼻祖とあお仰ぐなり。とくとく得々としてなんかい南海にう浮か

び、さんせんりがいと三千里外遠くだいほう大法をしんどう震土につた伝え、もくもく黙々として、

嵩山すうざんに九年くねん面壁めんぺきなしたもう。祖師そし西来意せいらいい、もとより

梁王りやうおうも識しらざるひつきようところ畢竟むくどく無功德かくねん。廓然かくねんとして

聖諦しょうたいなく、隻履せきり西にしに去さつてより杳ようとして消息しょうそくなし。

然りしかと雖いえども、祖師そしもこの土どに來きたる、法ほうを伝つたえて迷めい

情じようを救すくわんがためなり。不立ふりゆう文字もんじ、教外きようげ別伝べつでん、直じき

に人心じんしんを指ゆびさして、見性けんし成仏しょうじせしめらる。大悲恩だいひおん

徳極とくきわみなし。

さればなんじ 爾ごんら言か下みずに自えら回こう向へん返しょう照して、更さらに

別べつ処しよに求もとめざれ。身しん心じんと祖そ仏ぶつと別べつならざることを知し

つて、当とう下げに無ぶ事じなるべし。山さん僧ぞうが見けん処じよに約やくすれば、

釈しゃ迦かと別べつならず。眼めに在あつては見みるといい、耳みみに在あつ

ては聞きくといい、鼻はなに在あつては香かを嗅かぎ、口くちに在あつ

ては談だん論ろんし、手てに在あつては執しゆ捉やくし、足あしに在あつては運うん

奔ほんす。この何なにをか欠かん少しょうすと、宗しゆ祖う臨りん濟がい禅ぜん師じは呵かせ

られたり。

病やまい何れの所ところぞや。病やまい不自信ふじしんの所ところにあり。即今そつこん

聴ちよう法底ぼうていを識得しきとくすれば、自性じしやうすなわち無性むしやうにて、已すで

に戲論けろんを離はなれたり。不安ふあんの心しんを求もとむるに、不可得ふかどくな

りてつと徹てつしてぞ、二祖安心にそあんじんは得えたまえる。

寒暑かんしよたがいに移うつれども、慧玄えげんが這裡しやりに生死しやうじは無な

ししめと示しめされぬ。日日にちにちこれ好日こうじつ、人人にんにんこれ真人しんにん。行ゆか

んと要ようすれば即すなわち行きゆ、坐ざせんと要ようすれば即すなわち坐ざす。餓うえ来きたれば飯はんを喫きつし、困こんじ来きたれば即すなわち眠ねむる。
ただ平びよう常じようにして無ぶ事じなれば、無ぶ事じこれ貴きにん人と悟さとるべし。

第だい三さん行ぎよう事じ仏ぶつ道どう

正しよう法ぼうの道みち多た途となれど、要よう約やくすれば、戒かい定じよう慧えの三さん学がくを出いでず。三さん学がくは自じの一心いつしんに帰きし、定じよう慧えもと不ふ二に

にしてぜんかいいちによ 禅戒一如のみようどう 妙道なり。

戒かいとは止し悪あく修しゆ善ぜんの義ぎ、人人心地にんにんしんちの様相ようそうなり。故ゆえに

衆生しゆじようぶつ 仏戒ぶつかいを受うくれば、すなわち諸仏しよぶつの位くらゐに入るい。

位くらゐ 大覺だいかくに同おなじうし了おわる。まさぶつに仏戒ぶつかいを受うけんには、

無始劫来むしごうらいの罪障ざいしやう 悉ごとくみなさんげ 懺悔さんげすべし。懺悔さんげせん

と欲ほつせば、端坐たんざして実相じつそうを觀かんぜよ。衆罪しゆうざいは霜露そうろの如ごと

し、慧日えいちよくこれを消しようせん。已すでに懺悔さんげし了おわれば、身しん

くいさんごうしやうじやう
口意三業清浄にして方に菩薩の大戒を受くべし。

だいいちせつしやう

第一殺生するなかれ。もろもろの生命あるもの、

ころ

みずか

ころ

た

ころ

ことさらに殺すなかれ。自ら殺し、他をして殺さし

しゆじやうぶつしやうぐ

むることなかれ。衆生仏性具しぬれば、すなわち

ぶつし

ころ

しの

いずれも仏子なり。いかでか殺すに忍びんや。

だいにちゆうとう

第二倫盗するなかれ。吾等もとより空手にして、

われら

くうしゆ

よきた

くうしゆ

またかえ

いっしはんせん

この世に來り、空手にして又歸る。一紙半錢たりと

雖も、元来吾等に所有なし。わずかに可得の見あ

らば、すなわち盗むと示されぬ。一切の財宝惜しみ

なく、あまねく衆生に布施すべし。いかでか盗むに

忍びんや。

第三邪淫するなかれ。自性元来清浄なれば、

行事も自ら清浄なるを、梵行とては尊べり。

たとい夫婦の中とてても、淫らの所行あるなかれ。家

庭ていはこれ敬愛けいあいの場にわにして、子女しじよ養育よういくの道場どうじようなり。

これを乱みだすに忍しのびんや。

第四だいし妄語もうごするなかれ。得えざるを得えたりと誇ほこり、到いたら

ざるを到いたれりと説とくことなかれ。直心じきしんはこれ道場どうじような

り。行ぎよう住坐臥じゆうざがに脚きや下つかを照し顧ようし、愚ぐの如ごとく魯ろの如ごと

く、須すべらく潜行せんこう密用みつゆうすべし。自みずら独ひとりを慎つつしむべ

く、他たを欺あざむくに忍しのびんや。

だいがおんじゆ
第五飲酒するなかれ。愚痴ぐちの酒さけを飲のむことなかれ、

むみよう さけ よ
無明の酒に酔ようなかれ。自性じしやう靈妙れいみよう、主人しゆじん公慳こうせい々と

さ
して覚さめたれば、随所ずいしよに主しゆとなつて、立処りつしよ皆真みなしんなり。

みずか じしやう くら
自みら自性じしやうを晦くらまして、他たをして迷惑めいわくせしめんや。

ごと
かくの如ごときの菩薩ぼさつの大戒だいかい、当まさに尊そん重ちやうし珍敬ちんきやうすべ

あん めい あ
し。闇あんに明めいに遇あい、貧人ひんじんの宝たからを得えたるが如ごとし、こ

だいいし
れはこれわれらが大師だいいしなり。今身こんじんより仏身ぶつしんに至いたるる

まで、かた恭じけなくもぎようじ行持して、けたい懈怠のこころ心なかるべし。

じよう定とはざぜんざんまい坐禅三昧なり。ほかいつさいぜんなく外一切善悪のきようがい境界に向つ

しんねんおこて心念起らざる、これをな名づけて坐ざとなし、うちじしよう内自性

みを見て動どうぜざる、これをな名づけて禅ぜんとなす。ざんまい三昧と

しようねんそうぞくは正念相續なり。ぎよう行も亦またぜん禅、坐も亦またぜん禅、ごもくどうじよう語黙動静

あんねん安然としてせんいつ専一に、こじ己事をきゆうめい究明するは、ざぜん坐禅のようたい要諦

にして、しゆうもんだいいち宗門第一のぎようじ行事なり。

慧えとは智慧ちえなり。仏智ぶつちなり。自我じがの迷妄めいもうを脱却だつきやくし

て、不二ふにの妙道みようどうに徹てつするなり。尽十方世界じんじつぽうせかいは沙門しゃもんの

眼まなこ、縦たてには三世さんぜを貫つらぬき、横よこには十方じつぽうに彌淪みりんして、

刹土せつどとしてわが土どに非あらざるなく、瞬時しゆんじとしてわが時じ

光こうに非あらざるなし。今いまこの三界さんがいは悉ことごとくこれわが有うに

して、その中うちの衆生しゆじようは皆みなこれわが子こなり。

衆生しゆじよう病やむが故ゆえにわれ又また病やむ。慈悲じひ愛憐あいれんせざらん

や。劫ごう石せきたとい消しょうするのひ日ひありともわが願がん力りきは尽つき

ぎらん。尽じん未み来らい際さい、報ほう恩おん謝しゃ徳とくの思おもい、興こう隆りゅう仏ぶつ法ぽうの

志し、寤ご寐みにも忘わするべからず。